

吉田紀子 教授

比較芸術論、近代美術と社会 I・II、
フランス語

ゼミの学生たちと一緒に
芸術と社会の
架け橋となるような
研究室を築きたい

1980～1990年代に学生時代を過ごした吉田先生。サークル活動ではテニスやスキーを楽しんでいたが、みんなとワイワイ遊ぶことにどこか虚しさも感じていた。そこでヨーロッパ旅行に行く際には、各地で美術館を訪ねて本物の作品を一目見ようと計画。数回にわたる渡欧は日本では得られない体験を先生に与え、後にパリへ留学するきっかけにもなったという。19世紀以降の西洋美術に魅せられた吉田先生の研究人生は、学生時代に本物に触れた、まさにその瞬間に始まったのである。

自分の学びたいことを重視して
志望大学・学部を決定した

生まれも育ちも千代田区神田という生粋の東京っ子である吉田先生。実家は祖父の代まで漆器の卸商だったためか、お祝い事などがあるに珍しい食器が食卓に並ぶこともあったようだが、それ以外は特に美術やデザインと触れ合う機会が多かったわけではなかったようだ。「小・中学時代は活発でよく勉強しましたが、両親には『女の子』としてしつけられました。ピアノや習字といったおけいこ事を習っていました

たが、図工や美術が特に得意というわけではありませんでした」

日本の美術教育では、児童・生徒が自分で絵を描いたり物を作ったりすることはあっても、昔の有名な美術作品を鑑賞したり批評したりするようないことはほとんどない。音楽の授業でベートーベンやモーツァルトといったクラシックの名曲を聴かされるのとは対照的だ。吉田先生もその例にもれず、美術に関する鑑賞教育はほとんど受けなかったという。そんな中、中学の美術の先生はなかなかユニークな人で、授業中に日本の仏像様式の推移について話をしてくれた。

「おそらく自分の専門分野か、または趣味で仏像を見るのが好きな先生だったでしょう。今思えば、そのとき仏像の表情が時代によって変るのを面白いと感じたことが、後に美術史を専攻するきっかけになったのかもしれない」

高校は女子校だったが、自由で活動的な校風だったため、吉田先生の性格にぴったりであった。女子であるがゆえの自己規制を緩め、好奇心の赴くまま、素直にいろんなことに挑戦した高校時代。バドミントン部で汗を流すかたわら、休みの日には友達と旅行や観劇、コンサートにも

どんどん出かけたそう。もちろん、勉強も嫌いではなかった。特に塩野七生や司馬遼太郎、藤沢周平などの歴史小説の影響で過去の人々の生き様に興味があったため、歴史は積極的に勉強した。数学も好きな科目だったが、どういわけか同じ理数系科目の物理や化学は苦手であった。

そんな吉田先生だが、大学進学に際しては美術史を学べるところを探したという。「当時は今ほど大学の実学志向が進んでおらず、就職のためより自発的に自分の好きなことを学ぶところだ



吉田 紀子 (よしだ のりこ)

東京都出身。学習院大学文学部哲学科(美学美術史系)卒業後、サントリー・デザインミュージアム設立準備室に勤務。学習院大学大学院人文科学研究科哲学専攻(美学美術史系)博士前期課程修了。1997年よりパリ第十大学大学院に留学し、2003年同大学にて美術史学専攻博士課程を修了。美術史学博士。中央大学総合政策学部准教授を経て2014年4月より現職。専門は西洋近代美術史および西洋近代デザイン史。

という認識がありました。政治史や経済史も勉強したら面白いだろうと思いましたが、美術史の場合は作り手が亡くなった後も作品が残されているので、彼らの存在をより身近に感じられると考え、美術史を学びたいと考えました」

産業や社会としっかりと結びついたポスター美術の魅力に強烈に引きつけられた

吉田先生が入学した学習院大学は専攻ごとに入学者選抜を行っており、1年生から専門教育を受けるこ

とができた。

「100名に満たない定員の学科で、美術史専攻の学生は半分ほどしかいなかったもので、どんな講義も少人数。よく知った友人ばかりなので、とても学びやすい環境でしたね」

ちょうどそのころ、世間はバブル経済の絶頂期。学生たちの間には勉強だけでなく、遊びについてもいろんな体験をするべきだという風潮が浸透していた。吉田先生もテニスやスキーのサークル活動を楽しんでいたが、そのような生活にどこか空虚で満たされない気持ちも抱いていた。そこで一念発起、海外旅行ではみんなでわいわい遊びに行くのではなく、しっかりと目的を持った旅にしようとしたのである。

「せっかくヨーロッパに行くのに、ただ表面的に観光だけで終わらせるのはもったいないと考えました。そこで各地の教会や美術館を巡り、なるべく多く本物の美術作品に触れるようにしました」

吉田先生は年に1〜2回ヨーロッパを訪れたが、時にはたった一人で

諸国を回ることもあったという。

「イタリアでは教会に残されている壁画や彫刻なども見て回りました。現地で見ると、その作品が制作された街や気候、空気などを肌で感じる事ができます。美術が当時から人々の生活と密接に関わり続けてきたことを実感できたのは大きな収穫でした」

美術館巡りでは、フランスのオルセー美術館が強く印象に残った。本物の絵画作品は教科書で見るとは明らかに違う画面の質感があり、それがズバリと並んでいる様子に圧倒されたという。また、オルセー美術館では、アンリ・ルソーという画家



吉田先生が協力した「シレ展」(パリ、2010年)や「ロートレック展」(東京、2011年)の資料。



ゼミや講義で学生たちにフランスの美術と社会の関係性について解説する吉田先生。芸術と社会の架け橋となるような人材の育成を目指す。

の作品に出合ったのも大きな感動だった。ルソーはジャンゲルの絵ばかり描いているアマチュアの画家で、絵の具のマチエールが独特な作風が特徴。前衛画家として有名なピカソに見いだされてから注目を浴びるようになった人である。美術史上での位置づけが非常に難しいとされてい

る人物だが、その出会いがきっかけで、学部生時代はルソーの研究に多くの時間を当てることになった。

吉田先生は大学を卒業すると、サントリー美術館のデザインミュージアム設立準備室に学芸員アシスタントとして就職。ポスターコレクションを調査・研究する仕事をしていたが、そのうち産業や社会と美術がしつかり結びついているポスターの特性に、より深く興味を抱くようになった。当時、日本における西洋美術史学の第一人者である高階秀爾先生と出会うなど貴重な体験もし、美術館の現場で働くのもとても充実していたが、ポスターについてもっと深く勉強したいと考えて退職。大学院に進学し、19世紀末に描かれたフランスのポスターについて本格的な研究を始めた。

「ポスターの大きな特徴は、宣伝媒体という明確な機能を持ち、リトグラフの技法を用いて同じものが何枚も複製されている点。代表的な作家にはムーラン・ルージユで有名なロートレックなどがあります。フランスで

は早い時期からポスターをクリエイティブなものとして認識していて、批評家やコレクターも多いんですよ。1978年には世界で初めて、ポスターだけの美術館も開館しています」

フランスは、文化や芸術を重要な基幹産業としてとらえている国家。かつては建築・絵画・彫刻が美術のヒエラルキーの頂点に君臨しており、それ以外のものの評価は総じて低いものであったが、19世紀に陶器や織物のような日常生活で使用される工芸品を海外へ輸出するようになって以来、国を挙げて芸術産業に力を入れるようになったのである。そうして発展した産業の中には、今やフランスを代表する産業へと昇華したファッション業界や、ポスターを含めた広告業界などが含まれているのである。

19〜20世紀の美術史研究を通して芸術と社会をつなぐ人材育成を目指す

吉田先生は現在、「近代美術と社会」という講義を受け持っており、19〜20世紀のフランス美術史と政治・社会・産業史を照らし合わせて解説している。

「例えば、印象派は首都パリが再開発されたところに登場したもので、変わりゆく大都市の景観を独自のアングルから切り取っている点に特徴があります。また、かつてキリストが描かれたのと同じ大きさのキャンバスに労働者の姿を描くようになった背景には、社会思想の変化を見いだすことができます」

研究室では19〜20世紀の美術史が主な研究テーマ。作品や作家はもちろんだが、批評家や美術行政に携わる人物も積極的に取り上げていこうと考えている。批評家の書いたものを分析し、作家たちとの関係性を解明していくというのである。

「例えば、美術官僚であり、批評家でもあったロジェ・マルクスという人物は、有名なガラス工芸家エミール・ガレと同じロレーヌ地方ナンシーの出身で、ガレの作品について



大型の美術書や、日本だけでなくヨーロッパ各国で開催される展覧会のカタログでいっぱいの明るい研究室。アートな雰囲気とアカデミックな緊張感の中でゼミの授業は進められる。



授業に聞き入る学生たちの表情は真剣そのもの。



授業では厳しいけれど、吉田先生とゼミ学生の距離はととても近い。

多くの批評を残し、いろんな便宜を図ったことが知られています。この事例は、近代以降ジャーナリズムやマスメディアが力をつけていくにつれて、芸術作品が周囲によってプロデュースされる時代へ突入していくことを前触れています」

その延長上にある研究対象として吉田先生が興味を持っているものが一つが、アール・デコ様式である。アール・デコは二度の世界大戦の間の時代に生まれた機能的かつ合理的なデザインで、絵画や彫刻、建築、服飾、宝飾、ポスター、生活雑貨など多様な分野に大きな影響を与えたことが知られている。

「ちょうどこのころからポスターに産業としての大きな価値が見いだされるようになり、広告戦略の重要な一部としてグラフィックデザインという表現分野が確立されました。特にデザイナーという専門職が誕生したことは注目に値すると考えています」

広告業界は美術、マーケティング、法律、コミュニケーション、環境などさまざまな専攻が交差するところ。日本の大学ではまだ特定の学問領域として独立していないが、現場では大手代理店などの働きかけによって各分野の専門家が集まり、都市における統一的な広告法などについての研究が徐々に始まっていると

いう。フランスでは文化省の管轄となっているが、日本でも将来的には行政が力を入れることになるだろうと吉田先生は確信している。

「私のゼミには、19〜20世紀の西洋美術史はもちろん、美術館活動、都市計画、広告表現などに関心を持つ学生が集まっています。教室の内と外、理論と体験の双方向から学生の関心を高め、議論を深められるように努めています」

ゼミの学外実習では、東京都内を

中心に展覧会見学を行っている吉田先生。今後は全国各地の個性的な美術館を視察しようという計画中である。自らの体験を踏まえ、学生たちにも積極的に海外に出て本物の

作品に触れるようにアドバイスしている。

高校生の皆さんへ

高校生のときは、とにかく何事にも貪欲に取り組んで欲しいという吉田先生。特にヨーロッパの文化に興

味がある人には、美術展などに積極的に足を運ぶことを勧める。「最近では日本でも頻繁に美術展が催されるようになり、海外の美術館に所蔵されている有名な作品を実際に見られる機会は確実に増えています。東京と大阪以外にも地方都市を2〜3カ所回るケースが多いので、本物を見るチャンスをつかまえてほしいですね。」美術は学ぶほど面白さが深まっていくものなので、最初のきっかけが大切なのだという。

そんな吉田先生だが、繰り返し訪れるパリのさまざまな美術館では、毎回必ず新しい発見があり、とりわけ近年はEU圏内の文化交流が加速していることを実感する。

「作品は見る年齢や置かれている生活環境などで感じ方が全然違ってきます。そういう意味から考えても、美術は一生興味のつきない世界ではないでしょう。ヨーロッパの文化全般についても社会背景とあわせて幅広く学んでみると、美術作品に対してもますます興味が深まると思いますよ」